

江戸中期における能装束の色彩

山 口 憲

-
- | | |
|--------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 7. 地方の染色と京の染色 |
| 2. 能と装束の歴史 | 8. 染料の変遷 |
| 3. 色彩の歴史 | 9. 堅牢度・媒染 |
| 4. 能装束の色彩 | 10. 文献に見る染技法 |
| 5. 能装束の色彩 実例 | 11. 演能における能装束の色彩効果 |
| 6. 近世の染色 | 12. 能役者が選んだ能に登場する各役の能装束 |
-

論文要旨

織物の研究を通し、近世に集大成された能装束の色彩をあらゆる部分から眺めてきた。

江戸中期に能楽が武家の式楽として確立されると同時期に、能装束も完成をみた。その色彩において我国の歴史的背景を無視する事は出来ない。B. C.100年弥生時代頃から我国は大陸からいろいろな事を学び、その中の一つ染技術は、律令体制が確立された頃一気に開花し、その基礎となっている。

今日、我々の生活環境の中には多くの色彩が溢れそのほとんどが化学的な染料・技法から成り立っているが、この歴史はきわめて浅く、わずか130年そこそこである。それまでの長い間、自然から得るもので色彩は生まれ、これは日本に限らず世界中に共通する事であった。大別すると有機質の植物染料・動物染料、無機質の鉱物染料とがあり、有機質から抽出された染料が染織品に用いられた。日本の色彩は、平安時代、和様の文化の中から育まれた王朝の色彩・その後武家社会の中で研かれた武家の色彩・泰平の世になるにつれ力を得ていった庶民の色彩である。この中で武家社会の精神に大きく影響を受けた能装束の色彩が武家の色彩を代表していると考えられる。武家の式楽である能楽は武家を代表するものとしてその従事者は厳しく制約され管理されていたが、その色彩については、能役者が自由に選ぶ事の出来る唯一の世界であった。その対象は面・装束であり演能において、その能役者の精神性が重要視され、その曲をどのように表すかを定める事が出来た。その理由としては豊富な面・装束の存在と能楽に精進する役者の思いが高く評価され、それが能楽の本質につながっていた為では、なかるうか。

色彩の歴史的背景・江戸期の文献に基づく技法・現在の演能における色彩の演出効果など考えてみた。